

ハーブと歌による祈り 現代に生きる詩篇

キャロル・サック

バッハは神の言葉を与えてくれた、
モーツァルトは神の笑いを与えてくれた、
ベートーベンが神の熱情を与えてくれた、
神は音楽を与えてくれた、わたしたちが言葉なしで祈れるように。

作者不詳

[スライド1] 4世紀に聖アウグスチヌスは、こう言いました。He who sings prays twice. 「歌う人の歌は2度の祈りに等しい。」初めてこの奇妙な言葉を聞いた時、私にはその意味が分かりませんでした。しかし、この5～6年のあいだに、だんだん深く理解できるようになりました。このスライドでは、そのことについて詳しくお話したいとおもいます。

[スライド2] まず初めに皆さんを、中世のヨーロッパにお連れします。

[スライド3] 今から千年ほど前、フランスのクリュニー地方にあった、ベネディクト会の修道院です。

[スライド4] 当時、この修道院の活動は様々な方面に大きな影響を与えていました。

[スライド5] 修道士たちは「美」、つまり美しさの中に精神的なものを求めました。同様に、スピリチュアルな経験をするための一つの方法が、「美」、Beautyだとクリュニーの修道士たちは信じていました。

[スライド6～9] そこで 建築、ステンドグラス、タペストリーなど、様々なものに美を表現しようとしていました。

[スライド10] なかでも音楽には特に力を注いだのです。

[スライド11] クリュニー修道院の中に、ノートルダム寺院のような大きな聖堂がありました。大聖堂には聖歌隊が歌を歌う場所がありますが、そのことをラテン語でこう呼んでいました。

[スライド12] “*deambulatorium angelorum*”これは「天使の歩く道」という意味です。

当時の修道士たちは、そこに集まっては聖歌を歌っていました。一日に7回、昼も夜も、みんなで集まって歌っていたのです。よく歌われたのは旧約聖書にある詩篇

[スライド13] です。このように1年365日、歌で祈りを捧げる習慣は、聖ベネディクト会にずっと受け継がれてきたものです。6世紀に始まり1500年たった今でも、ずっと続いています。

修道士たちは、このように信じていました

[スライド14] おごそかな気持ちで演奏される音楽は、この世と永遠の世が交わる空間を作りだせるのだと。

[スライド15] 先ほど修道士たちが「美」、Beautyに特別な思いを持っていたことをお話しました。実はもうひとつ、この修道院から発展してきたものがあります。それは現代の病院というシステムです。

[スライド16] もともとは修道院にあった介護室、いわゆる診療室(Monastic infirmary)のようなものでした。この診療室で病人や体の弱い人、死に行く人たちを看護していたのです。

[スライド17] 修道士たちは病に苦しむ人たちを、まるでイエス・キリストに対するように手厚く看護しました。

[スライド18] 看護に当たって修道士たちが目指したのは、「体の介護と魂の癒し (Care for the body, cure for the soul)」ということでした。

修道士たちは死に逝く仲間に、特別な思いを込めて手厚い介護をしましたが、やがて、それは一つの儀式になりました。死の床にある人々を愛や尊敬の念で包み、心の支えになり、みんなで思いを分かち合う…

[スライド19] そして美しい音楽で死に逝く人々を癒したのです。ある修道士に死の近いことが告げられると、みんなで彼のそばを離れずに、

[スライド20] 聖書の言葉を唱え、聖なる歌を歌いながら、無事天国に導かれるまで、ずっと歌い続けたのです。

それでは「体の介護と魂の癒し」とはどういうことか、詳しくお話ししましょう。

[スライド21] 「体の介護」は手術や薬による治療と、行き届いた温かい看護によって実践されました。では

[スライド22] 「魂の癒し」とはどのように行ったのでしょうか。「家路への最後の道」を逝く人たち、つまり、死に逝く人たちと、共に歩みながら、絶え間なく祈りを唱え、その人を思いやるのが、そのやり方でした。修道士たちは死の床にある人を一人にはしませんでした。

[スライド23] 息を引き取ったあとも、ずっと歌い続けたのです。それは

[スライド24] 「臨終の癒し」と呼ばれていました(Therese Schroeder-Sheker, *Transitus: A Blessed Death in the Modern World*, St. Dunstan's Press, 2001参照)。

人間の最後の呼吸を、ベネディクト会の修道士たちは「死」とは呼びませんでした。

[スライド25] 「死 (death)」という言葉は、英語では「永遠の終わり」を意味します。その代わりラテン語の *transitus* という言葉を使いました。これは、変化、旅、移動を意味する言葉です。ちょうど母親の産道を通して出てきた赤ん坊に、新しい世界が最初の呼吸で開けると同じように、キリスト教の伝統において

[スライド26] 最後の呼吸は想像を超えた美しい世界へのすばらしい第一歩なのです。だからこそ修道士たちは、これ以上ない敬意を込めて死に逝く人々を介護したのです。

ここまでの話は死と、死に逝く人々をどのように扱うかをめぐって、11世紀クリュニーの修道院運動から広がっていった大きな影響力を持つ様々な伝統についてお話ししてきました。

[スライド27] ここにクリュニー(中心の赤い点)の地図があります。その他の小さな赤い点は、クリュニーから生れた、あるいはなんらかの影響を受けた、およそ1500にのぼる修道院の所在地を示しています。ローマを除けば、クリュニーは西洋世界で最も影響力を持った修道院でした。その影響力ゆえに、フランス革命で破壊されてしまったのです。

[スライド28] ここで400年のときを飛び越えて、同じブルゴーニュ地方にあるクリュニーの隣村を訪ねてみましょう。

[スライド29] この写真はポーヌと呼ばれる村です。この美しい建物は1451年に完成しました。

[スライド30] 内部はこのように大変広いホールになっていました。

これは「神のホテル 日曜の朝、貧者の大ホールにて」というタイトルが付いたポーヌの絵です。ご覧のとおり、いろんなことがここで起きています。奥の方を見ると、そこは教会で、聖餐が執り行われています。手前では村の人たちが思い思いの活動をしているのがわかりますね。お弁当を楽しんでいる人たち、友だちとおしゃべりに興じている人たち。ペットもいれば、赤ちゃんもいる。

あらゆる年齢の人たちがいます。

[スライド31] ホールの両端にはベルベットで仕切られた個室とベッドがあります。

[スライド32] ここでは個室がどうなっているか、詳しく見ることができます。ここに並んでいるのは、死に逝く人たちの中でも最も貧しい人たちのためのベッドです。

[スライド33] ご存じと思いますが、赤いベルベットは王室が使う布です。当時の食器は木

製でしたが、このホスピスで使われていたものは(便器すら!)銀でできていました。よくご覧ください。

「神のホテルと大ホール」のスライドに戻ります。

[スライド34] これは村のホスピスです。ここではさまざまなことが起きています。現代では、死期が迫った人たちは誰にも見えないところにひっそりと移し置かれています。けれどもこの絵の中では、生きている者も、死を間近にした者も、ごく当たり前のように一緒にいます。私たちが思い描く死のイメージとはだいぶ違いますね。

400年経ってもなお、クリュニーの修道院の影響力がいかに大きかったかがわかります。

[スライド35] ところで、ポーヌにあるこのホスピスは520年もの間(つい1971年まで)、ホスピスとして利用されていたのですよ。今は博物館となっていて、建物を見学することができます。おいしいワインでも有名です!

ここで現代社会に目を向けてみましょう。

[スライド36] アメリカでは、たくさんの人たちが孤独に死んで逝きます。日本はどうでしょうか?最近マスメディアが伝えるところによると、やはり日本でもかなりの人たちが孤独に死んで逝くようです。

[スライド37] ありがたいことに、現代の病院は清潔で、設備も充実していますし、医療技術も進歩し続けています。

[スライド38] にもかかわらず、孤独に死んで逝く人たちが減ることはありません。

[スライド39] とても残念なことです。

しかし、多くの医療関係者、そしてそれ以外の人々においても、この現実に気づき始め、[スライド 40] 死に行く人たちの手を取り、彼らは一人ではないこと、大切な存在であり尊厳があることを伝えはじめています。

[スライド 41] これこそがリラ・プレカリアの活動の望みです。リラ・プレカリアとは祈りの豎琴を意味します。身体・感情・霊性、それらのどの側面においても、死に行く人や何らかの痛みの中にある人のために、ハーブと歌声を通して、祈りに満ちた場を提供したいと考えています。

[スライド 42] 私たちはこれをパストラル・ハーブ・ミニストリー(ハーブによる奉仕)と呼んでいます。パストラル・ハーブ・ミニストリーは音楽療法の一形態ではなく、パストラル・ケアから生まれた独自の存在であり、最も大切なのは、音楽を通して伝えられる祈りに満ちた心、「生きた祈り」とも言えるものです。

[スライド 43] リラ・プレカリアと全く同じものではありませんが、この活動は、米国オレゴン州のマウントエンジェルに拠点を置く先駆的活動チャリス・オブ・リポーズ・プロジェクトから深くインスピレーションを受けています。

[スライド44] Therese Schroeder-Shekerはミュージック・サナトロジー(音楽死生学)と呼ばれる分野の創設者です。彼女の影響は徐々に世界中に広がりつつあります。

[スライド45] 18ヶ月に及ぶリラ・プレカリア研修講座の第一期生と講師たちです。この研修講座は日本福音ルーテル社団JELAからのサポートを受け開設されています。

[スライド46] リラ・プレカリアの活動では、ハーブの弦と声を通して、

[スライド 47] そしてなによりも、祈りに満ちた心を通して患者さんたちに伝えます。「あなたは一人ではありません。

[スライド 48] あなたは愛されています。神様はあなたを守り、あなたの旅の間も、ともにいてくださるのです。」

[スライド49] 地上での人生に何が起ころうとも、音楽が神の愛で彼らを包みます。

[スライド50] 「あなたは一人ではありません。あなたとともに祈らせてください。」

ハーブを持って患者さんのところへ行くと、私たちはまず簡単な自己紹介をします。
[スライド51] 次に患者さんの呼吸を数えて、それから黙って患者さんを観察します。そうやってどんな音楽が合うのかを感じ取るのです。
[スライド52] 患者さんを観察する上でいちばん大切なのは、呼吸のペースを知ることです。この点について、もう少し詳しくお話ししましょう。私たちの命はさまざまなリズムで成り立っています。
[スライド53] たとえば私たちの脈拍数、心拍数、呼吸パターン、これらはみな人それぞれ違って、その人特有のリズムがあるのです。私たちはこのリズムを尊重し、患者さんの呼吸のペースに合わせて音楽を奏でるのです。つまり患者さん本人が音楽を導きます。演奏の中心にいて私たちを引っ張って行くのは患者さんです。
[スライド54] 患者さん本人が指揮者、コンダクターなのです。たとえ意識がなくても、患者さん本人が指揮することで、彼らに深い尊厳を与えることができると私は感じていますし、そう深く信じています。
[スライド55] ヘブル語で「スピリチュアリティ(霊)」を指す言葉、*ruach*は、「息」もしくは「風」を意味します。ギリシャ語の*pneuma*も同じですね。ですから患者さんの呼吸に注意を向けるとき、またそのようにして彼らのかけがえのない存在に敬意を払うとき、私たちは文字通り霊的な(スピリチュアリティの)実践をしているのだと私は信じています。

リラ・プレカリア研修講座では、生徒たちは主に二つの施設で実習を行います。
[スライド56] 一つはルーテル教会が運営する東京老人ホームです。
[スライド57] ここは規模も大きく、とても素敵な施設です。毎回三名から四名の患者さんのもとを訪ねることができます。
[スライド58] 自習を通して、「私たちはあなたとともにいます。あなたは一人ではありません。」と伝えられるように願っています。
[スライド59] 実習二つ目の場所は、日雇い労働者やホームレスの人々が多く集まった山谷という地域にあります。
[スライド60] ここが在宅ホスピス「きぼうのいえ」の入口です。のちに天国へと旅立たれた患者さんとともに、三名の生徒が写っています。
[スライド61] このホスピスの創設者である山本さんです。理想と深い信念をもった方です。
[スライド62] ご覧のとおり、このホスピスには大きな空間はありません。しかし、優しく愛情にあふれたケアに満ちています。繰り返しになってしまいますが、
[スライド63] ハーブと歌による祈りに満ちた場とすることで、身体には看護(care)を、魂には癒し(cure)を提供できるように私たちは願っています。
[スライド64] きぼうのいえの玄関には、次のようなアッシジの聖フランチェスコの祈りが飾られています。「主よ、私をあなたの平和の道具(instrument)としてください。」私たちの場合、この祈りは以下のようなようになります。「主よ、私たちをあなたの平和の楽器(musical instruments)としてください。」

私は小さなハーブを携えて、
[スライド65] 刑務所の中にいる人たちのもともしばしば訪れます。彼らはこのかたい壁の向こうにいるけれども、
[スライド66] 音楽は彼らの心を和ませ、ある種の自由を見つける手助けをします。「音楽は世界を変える」という言葉は真実です。たとえそれがどのような世界であったとしても・・・。
[スライド67] 「神は音楽を与えてくれた、私たちが言葉なしで祈れるように。」

[スライド68] リラ・プレカリアには、米国のハーブ卸業者であるハーブ・インターナシヨナ

ルより提供されたトゥリブレット・ハーブがあります。なんとありがたいことでしょうか！
[スライド69] これらの美しいハーブについて、こちらに記載されたホームページで詳細を知ることができます。

先ほどご説明した実習のほかに、リラ・プレカリア研修講座には、メインとなる三つの分野があります。

[スライド70] 一つ目は、ハーブと歌の個別レッスンからなる音楽部門です。

[スライド71] ハーブ指導者の神藤雅子さんによるハーブのレッスンと、

[スライド72] 発声と呼吸の指導者、中山康子さんによる歌のレッスンから構成されています。

そして音楽のレッスンのほかに、二つ目の分野として、

[スライド73] 三鷹のルーテル学院大学「人間成長とカウンセリング研究所(PGC)」における一年間のカウンセリング講座があります。普段、私たちはベッドサイドにおいてあまり言葉を使わないのですが、

[スライド74] この講座を受けることで、私たちのやり方をただ持ち込むだけよりも、患者さんに対して十分に注意を払うために、よりオープンな状態でベッドサイドへ行くことが可能になります。

三つ目の重要な分野は、

[スライド 75] 特に旧約聖書の詩編との深いかわりに基づいた神学です。英語の「PSALMS(詩編)」はギリシャ語の「PSALMOS」から派生した言葉で、その字義は、「弦楽器の伴奏に合わせて歌われたもの」となります。それはまさしく私たちが行っていること、ハーブの伴奏に合わせて祈りに満ちた歌を歌うということ、そのものです。

[スライド 76] そしてこのことは同時に、3000 年前にダビデ王が行ったことでもあります。ダビデ王が、リラ・プレカリアの活動における聖書に基づいた教えとインスピレーションを与えてくれました。サムエル記上 16 章 23 節には次のように書かれています。

[スライド 77] 「神の霊がサウルを襲うたびに、ダビデが傍らで豎琴を奏でると、サウルは心が休まって気分が良くなり、悪霊は彼を離れた。」

次にお見せするのは、

[スライド78] イスラエル人のアーティストから頂いたハーブの絵です。ご覧のように、ハーブを描く線が少し変わっていますね。それというのも、

[スライド 79] 近づけてよく見てみると、ヘブル語の文字で描かれているのがお分かりいただけると思います。実際に、この絵はヘブル語で書かれた詩編全巻からなっているのです。

[スライド 80] つまり、人々を助けるための祈りとしてのハーブと歌を用いた 3000 年の歴史を、この詩編は表現しているといえるでしょう。

[スライド 81] 私たちの活動が今日のための生きた詩編となることを、切に願っています。

[スライド 82] リラ・プレカリアが指導されている JELA ミッションセンターの窓です。このステンドグラスは新約聖書に書かれたマタイによる福音書 25 章をあらわしています。「この最も小さい者の一人にしたのは、

[スライド 83] わたしにしてくれたことなのである。」

[スライド 84] 私たちは祈っています、神からの恩寵を得て、私たちがその人を神の愛で包み込み、それによって、その人には尊厳・価値があるということに自ら気づくことができるかもしれないと、

[スライド 86] 神にとってもまた他の人々にとっても大切な存在であるということを彼らが悟り、強く愛にあふれた神の腕に抱かれていると感じてくれるように、

[スライド 87] そして、彼らはその旅路に、安らぎを見出してくれるように。